

聖書の中の星めぐり

先週、降臨節の始まりにあたり、東の国の博士とともに星を見上げて、クリスマスには必ず新しく救い主イエスさまにお会いしたいと切望して旅を始めたい、とお話ししました。

そのことがずっと思いの中に続いていますので、予告を変更して、今日は聖書の中の星をめぐってみたいと思います。7箇所をめぐります。

皆さんは最近、星を見られましたか。

心の中で星を思い浮かべながら進んで行きましょう。

1. 神は太陽と月と星を造られました。創世記 1 : 16

創世記の第 1 章によれば、天地創造の始め、神さまは太陽と月と星を造られました。

後に、イスラエルのある詩人はこう歌いました。

「あなたの天を、あなたの指の業を、わたしは仰ぎます。月も、星も、あなたが配置なさったもの。そのあなたが御心に留めてくださるとは、人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう。あなたが顧みてくださるとは。」詩編 8 : 4 - 5

2. アブラハムは天の星を仰いで神の声を聞き、新しく神を信じました。創世記 15 : 5

同じ創世記です。わたしたちの信仰の先祖は、アブラハムとサラです。遠い昔、アブラハムは、自分に呼びかけられた神の声に従って、家族、一族とともに住み慣れた世界を後にして、見知らぬ国に旅立ちました。しかし神が与えてくださった土地の約束も子孫の約束も実現せず、家族内の葛藤も抱えて、将来を思うと恐ろしく、夜、天幕の中でうずくまっていました。

主は彼を外に連れ出してこう言われました。

「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい」

「あなたの子孫はこのようになる」

星の光の中にアブラハムは神の臨在を経験し、新しく神を信じて生き始めました。

3. ベオルの子バラムは、倒れ伏しつつ、救い主のしるしとしてひとつの星がヤコブから進み出、ひとつの笏がイスラエルから立ち上がるのを見ました。民数記 24 : 17

アブラハムから数百年、時代は下って、モーセによるイスラエルのエジプト脱出に続く旅のさなかです。

約束の地を目指して旅してきたイスラエルをモアブの王バラクは非常に恐れ、東の国に使いを出してバラムという霊能者を招きました。ところがイスラエルを山の上から見つめたバラムは、イスラエルを呪うのではなく、反対に三度もイスラエルを祝福してしまいます。このように記されています。

「ベオルの子バラムの言葉。目の澄んだ者の言葉。

神の仰せを聞き、いと高き神の知識を持ち、全能者のお与えになる幻を見る者。

倒れ伏し、目を開かれている者の言葉。

わたしには彼が見える。しかし、今はいない。彼を仰いでいる。しかし、間近にはない。

ひとつの星がヤコブから進み出る。ひとつの笏がイスラエルから立ち上がり、モアブのこめかみを打ち砕き、シエトのすべての子らの頭の頂を砕く。」民数記 24 : 15 - 17

今はいないけれども、やがて必ず来られる方をバラムは見ていました。

「ひとつの星がヤコブから進み出る。ひとつの笏がイスラエルから立ち上がり、モアブのこめかみを打ち砕く」

バラムは「倒れ伏し、目を開かれている者」と言われています。この世界と人の苦しみを知って倒れ伏すほどに苦しんでいたからこそ、彼は目を開かれて、やがて来られる救い主を見たのでしょう。

4. 星は喜々として、自分の造り主のために光を放ちます。バルク書 3 : 35

旧約聖書・続編バルク書の言葉。これは先週ご紹介しました。

新約聖書に移ります。

5. 輝く星は東の博士らを救い主のもとに導きました。マタイ 2 : 9

「彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。学者たちはその星を見て喜びにあふれた。」2 : 9 - 10

わたしたちにも星があってほしい、と願います。

6. パウロは、苦難に耐えて福音のために戦う信徒を、世にあって輝く星にたとえました。フィリピ 2 : 15

「だから、わたしの愛する人たち、いつも従順であったように、わたしが共にいるときだけでなく、いない今はなおさら従順でいて、恐れおののきつつ自分の救いを達成するように努めなさい。あなたがたの内に働いて、御心のままに望ませ、行わせておられるのは神であるからです。何事も、不平や理屈を言わずに行いなさい。そうすれば、とがめられるところのない清い者となり、よこしまな曲がった時代の中で、非のうちどころのない神の子として、世にあって星のように輝き、命の言葉をしっかり保つでしょう。こうしてわたしは、自分が走ったことが無駄でなく、労苦したことも無駄ではなかったと、キリストの日に誇ることができるでしょう。」2 : 12 - 16

この世の価値観に押し流されず、キリストを信じて福音のために労苦する者は、この世にあって星のように輝く。希望の星だということです。

7. 長老ヨハネは「わたしは輝く明けの明星」と言われる主イエスの声を伝えました。ヨハネの黙示録 22 : 16

今日の星めぐりは、聖書の冒頭、創世記第 1 章から始めたのですが、最後は聖書の最後の書物、ヨハネの黙示録の最後の第 22 章です。

キリスト教迫害の恐ろしい闇の中で、長老ヨハネは天に引き上げられて天上の礼拝を目撃しました。彼は、長い苦難と戦いを経て、悪の力が滅ぼされ、神の国が輝きわたる幻を示されました。そして最後に、ヨハネはイエスの声を伝えています。

「わたし、イエスは使いを遣わし、諸教会のために以上のことをあなたがたに証しした。わたしは、ダビデのひこばえ、その一族、輝く明けの明星である。」 22 : 16

イエスは明けの明星。イエスさまは、「わたしはあなたがたの希望である」と言われます。「わたしがあなたがたを照らし導いているから、希望を失わずに歩み続けなさい」と言われるのです。

希望の星、わたしたちにとっての希望そのものである主イエスさま、あなたを仰いで地上の道を歩ませてください。アーメン

(2011/12/04 京都聖三一教会)